

暗闇に建つ金閣

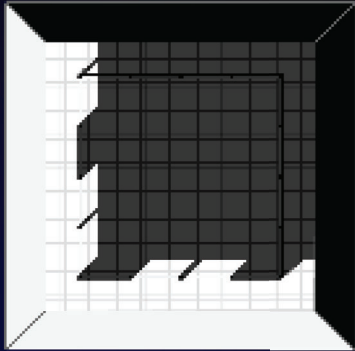
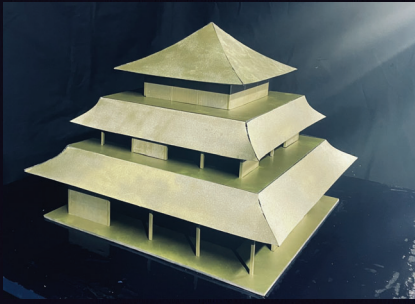
夜空の月のように、金閣は暗黒時代の象徴として作られたのだ。そこで私の夢想の金閣は、その周囲に押しよせている闇の背景を必要とした。闇のなかに、美しい細身の柱の構造が、内から微光を放って、じっと物静かに坐っていた。人がこの建築にどんな言葉で語りかけても、美しい金閣は、無言で、繊細な構造をあらわにして、周囲の闇に耐えていなければならぬ。

(中略)

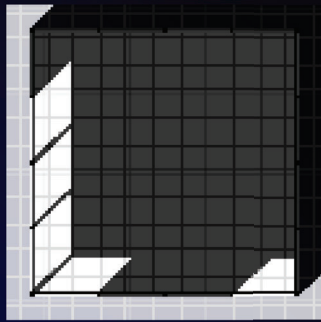
そうして考えると、私には金閣そのものも、時間の海をわたってきた美しい船のように思われた。美術書が語っているその「壁の少ない、吹ぬきの建築」は、船の構造を空想させ、この複雑な三層の屋形船が臨んでいる池は、海の象徴を思わせた。

三島 由紀夫 『金閣寺』

三島由紀夫の『金閣寺』から、画像でしか金閣を見たことのない主人公が金閣を想像する場面を引用し、本来考えられやすい陸ではなく、海をグランドレベルとして考えた。金閣が闇の背景を必要とした、という部分に注目した。一般に金閣という、青い空や新緑の木々を背景にした堂々とした佇まいを連想させるが、主人公の夢想の金閣は、暗闇がないと成り立たないものだと考えられる。その金閣を模型という形にするために、光が当たる部分を金色に、陰影になる部分を黒色にした。特に、本来木製である屋根までも金色するという大胆な変化によってこの金閣が空想のものであるということを象徴付けている。



三階



平面図 150:11階

